#善きギャルの条件

好辣妹的条件

#スマートフォンに通知が入った時、まず見間違いを疑った。

看到手机上收到的通知，四十七还以为自己眼花了。

#　もしこの通知が真実だった場合、自分たちは致命的なミスをしていたことになる。それはありえないことだし、認められることではない。

如果这个消息是真的，说明我们就已经犯下了要命的错误。这种事情不可能，也让人无法相信。

#　しかし、どれだけまばたきをしても通知が消えることはなかった。指を伸ばしてアプリを起動すると、マップ上にオレンジ色の光点が浮かんだ。

但是再怎么盯着手机，那个通知也没有消失。伸手点开APP，地图上浮现出橙色的光点。

#　これは見間違いではない。

这肯定不是看错了。

#　食べかけの食事をそのままにして自室へ向かう。クローゼットからロングコートを取り出すと、それを身にまとい、ベランダから外に飛び出した。

放下吃到一半的东西，银华回到房间。拿出衣橱里的风衣套到身上，然后直接从阳台跳了出去。

#　意識を集中させ、足裏から銀色の粒子────を放射する。

集中意识，从脚底放出银色的粒子——祓气。

#　空中で体勢を整え、は祓気を足場にして夜空を駆け始めた。目指すはオレンジ点が表示されている場所。スマートフォンをチェックしながら、目的地へ疾走する。

在空中调整姿势，银华以祓气立足，穿过夜空。对照着手机，赶向手机上标记着橙色光点的地方。

#　そんなはずはない、という気持ちが拭えない。

银华心里满是「这不可能」的想法。

#　自分たちはやり遂げた。あのおぞましい怪物たちと血みどろの戦いを繰り広げ、あらゆる方法を使ってやつらを探し、最後に勝利をつかみ取った。

这些事情早已被彻底解决。大家与那些恐怖的怪物浴血奋战，使用各种方法找到它们，并最终取得了胜利。

#　これは単なるアプリの誤作動であり、それ以外の何事でもない。

这单纯只是APP的误报，除此以外其实什么事都没发生。

#　そんな望みにも似た考えは、すぐに砕け散った。

但这个像是愿望一样的念头，马上就被现实击碎了。

#　銀華が目的地に到着した時、ひとりの少女がに襲われていた。

银华到达目的地的时候，有一个少女正在被眷属袭击。

#　即座に介入し、眷属を滅却したが、あと数秒遅ければこの少女──は眷属のによって斬り裂かれていただろう。

四十七立即加入战斗，消灭了眷属。要是再晚几秒的话，这个少女——盛黄琉花恐怕就要被眷属的爪子一刀两断了。

#　寸前で間に合ったとはいえ自分の責任は重い。なにを平和ボケしていたのか。数ヶ月前の自分が見ていれば『んでいる』と一喝することは間違いない。

虽然在最后一刻赶上了，但自己还是难辞其咎。自己怎么会这么沉溺于和平？要是几个月前看到自己这个样子，肯定会呵斥一声『懈怠』。

#　しかし、なぜここに眷属がいるのか。

但是，为什么这里会有眷属？

#　眷属を生み出せる者たちはすでにいない。孤立した眷属が自力で生き残れる可能性もかぎりなく低いはずだ。まさか自然発生したとでもいうのだろうか。そうだとすれば、自分たちはどのような対策を取るべきだろうか……。

现在已经没有会生育眷属的东西了。而落单的眷属也不太可能独自活到现在。难道说是自然产生的吗？如果真是这样，组织要采取什么办法应对呢……。

#　後ずさりする音が聞こえて、考えを止める。

听到畏缩的声音，银华停下思考。

#　盛黄琉花がえた表情を浮かべてこちらを見ていた。眷属に襲われたことや先程の戦闘を見たことでショックを受けているらしい。眷属が出現した理由は気になるが、この場は彼女の心的ケアを優先させるべきだ。

然后看到盛黄琉花脸上满是害怕地看着自己。看来被眷属袭击，还有刚才的战斗给她的冲击有些大。虽然自己很在意为什么眷属会出现，但眼下应该还是要优先照顾一下她的心情。

#　銀華は一息ついてから、自分の事情──ヴァンパイアハンターについて話すことにした。

银华叹了口气，决定说出自己的秘密——关于吸血鬼猎人的事情。

#

#　　　　◆　　　◆　　　◆

　　　　◆　　　◆　　　◆

#

#　自販機で購入したペットボトルを唇に押しつけ、に水を流し込むと、疲労で熱くなった体が急速に冷えていった。

把从自动售货机买来的瓶装水送到嘴边，任水流过喉咙。因疲劳而变得燥热的身体马上凉快了下来。

#「ぷはっ……潤うわ～……」

「呜哇……爽~……」

#　ペットボトルから口を離し、太ももをみしだきながら横を見ると、フードを外したがこちらを見守るように立っていた。

喝完水，琉花一边揉着腿，扭头看向旁边。四十七摘下兜帽，站在自己身边，像是在保护自己一样。

#　月明かりの下でロングコートを身にまとう銀髪の美少女。アニメのコスプレのようにも見えるが、四十七銀華には妙に似合っている。

身穿风衣的银发美少女，站在月光之中。看上去就和cosplay一样，但这样一身在四十七银华身上有种说不出的合适。

#　彼女は琉花の視線に気がつくと、尋ねるように言った。

她看到琉花的视线，小心地开口问到。

#「落ち着いたか？」

「冷静下来了？」

#「ぜんっぜんっ！」

「完全没有！」

#　体は冷えても心臓はまだバクバクしているし、汗なんて今のほうが出ている。

身体已经平静下来，但胸口还在噗通噗通地跳，冷汗也一直在往外冒。

#　あの黒い塊はなんなのか。元ヴァンパイアハンターとはなんなのか。さっきまで手にしていた槍がなくなっているのはどういうことなのか。

那个黑块是什么？什么是前吸血鬼猎人？刚才还握在手里的那把枪，为什么现在又不见了？

#　命を救ってくれたことには感謝しているが、震える体が四十七に説明を求めている。

虽然很感谢她救了自己，但这浑身发抖的身体还是在期待四十七的解释。

#「ヴァンパイアって、漫画とか映画に出てくるやつ……でいーんすよね？」

「你说的吸血鬼，就是漫画还有电影里面的……那种对吧？」

#　琉花の質問に、四十七は静かにいた。

对于琉花的疑问，四十七平静地点了点头。

#「そうだ。吸血鬼やノスフェラトゥ、ナイトウォーカー、グールという別名もある」

「是的。也有吸血鬼（Vampire）、诺斯费拉图（Nosferatu）、夜行者（Night Walker）和食尸鬼（Ghoul）的说法」

#「ヴァンパイアハンターってのは……？」

「那吸血鬼猎人又是……？」

#「それらを退治する人々のことだ。狩人とも言う」

「就是指消灭它们的人。也可以叫作猎手」

#　冗談のような内容をな調子で話す四十七に、琉花は苦笑いを浮かべてしまった。

四十七一脸严肃地说着像玩笑一样的话。琉花看着四十七，脸上浮现出些许苦笑

#　ヴァンパイアにヴァンパイアハンター。

吸血鬼还有吸血鬼猎人。

#　漫画やドラマでしか聞いたことがない単語。そんなものが実在するなんて簡単に受け入れることはできない。自分の持っていた常識がひっくり返ってしまう。

琉花还不太能相信这些只会在漫画和电视剧里的东西，居然真的存在。这完全违背了自己的常识。

#　だが、実際に自分は怪物に襲われた。

但是，自己确实被怪物袭击了。

#　その脅威から助けてくれた人物が『いる』と言っているのだ。それならば、

既然帮助自己渡过危机的人都说了『是的』。那么，

#「よし、よし……決めた」

「好，好……我决定了」

#「決めるとは、なにを？」

「什么决定，决定什么？」

#「ヴァンパイアはいる。四十七さんはヴァンパイアハンター。オールりょーかいっす」

「这个世界上有吸血鬼。四十七同学是吸血鬼猎人。我已经全部搞懂了」

#　琉花が四十七への信頼ゲージを一気にマックスまで引き上げると、四十七は形のいいをませた。

看到琉花一幅信赖值满格的样子，四十七形状姣好的眉毛不禁皱了皱。

#「本当に信じているのか？」

「真的信了？」

#「もちっすよ。命の恩人の言葉なんだから、信じないわけにはいかないし……あ、つか、四十七さんってがわかるんだし、ほれ、あたしの顔見て、顔」

「当然啦。这可是救命恩人说的话，怎么会不相信呢……啊，对了，四十七同学不是能分辨是不是在说谎嘛，来，看这边，看着我」

#「ほ、本当に信じている……」

「确，确实是相信了……」

#　なぜか困惑している四十七を放置して、琉花はスクールバッグの中身を拾い集めることにした。アスファルトにきつけられたが、幸いどれも壊れてはいないようだった。

先把还在困惑的四十七放在一边，琉花开始把刚才从书包里掉出来的东西捡起来。虽然它们被径直扔在了柏油路上，但好在看上去都没有什么损坏。

#　スマートフォンを拾い上げる時、ネズミのが見えた。腹部を切り裂かれ、臓物がはみ出ている。

捡起手机的时候，琉花注意到老鼠的尸体。腹部被切开，内脏都流到了外面。

#「つか、ヴァンパイアってネズミなんすね。初めて知ったわ」

「唔呃，吸血鬼居然是老鼠变的诶。我还是第一次知道」

#　琉花が死骸のグロテスクさにげんなりしていると、四十七は、いや、と言った。

听到琉花对尸体有些嫌恶的声音，四十七说：「不是的这样」。

#「これはヴァンパイアではない」

「这不是吸血鬼」

#「え……じゃ、なにこれ？」

「诶……那，这是什么？」

#「これは眷属というものだ。ヴァンパイアが小動物や昆虫に血液を注入して作り出す怪物で……配下のようなものだ」

「这是眷属。吸血鬼把血液注射给昆虫或者小动物，这样子做出来的怪物……和手下差不多的东西」

#「なーほー……じゃ、実際のヴァンパイアってどんなんなん？　やっぱかっけー感じ？」

「这样啊——……那，真的吸血鬼是什么样子？帅到不行啦——的感觉？」

#　琉花が聞くと、四十七は口をムッとさせた。

琉花的话让四十七撇了撇嘴。

#「ヴァンパイアが美形であるというのはフィクションのイメージだ。実際のヴァンパイアは悪辣で姑息。人類にとって害しかなさない害獣以下の存在だ」

「你们对吸血鬼的印象都是好看又帅气。但实际上的吸血鬼恶毒又狡猾。对人类而言不过是无恶不作的害虫而已」

#「ア、アクラツでコソク……」

「恶，恶毒又狡猾……」

#「人を襲って血肉を奪い、世界の秩序を破壊することに快楽を見出す。同胞に仲間意識を感じることはなく、社会に被害をき散らすためだけに生きる連中……やつらは文字通りの人でなしどもだ」

「袭击人类夺人血肉，以破坏世界秩序为乐。与同族也不会有合作意识，一群活着也只会在社会上造成破坏的东西……就像字面意义一样，它们根本不是人」

#　四十七の口調は刺々しかった。ヴァンパイアハンターの活動で培ったヴァンパイアへの気持ちが噴き出ているらしく、表情も険しかった。

四十七的语气很尖锐。这份与吸血鬼的接触中渐渐积攒的愤恨，让她的表情都严肃了起来。

#　怒りに呼応するように、彼女の銀髪がふわりと浮かび、体の周りに綿毛のような銀色の光が浮かび始めた。

与这份愤恨一起，四十七的银发轻轻地飘了起来。一层轻柔的银光隐隐地在四十七身边浮现。

#「ちょちょ、なんかれてんすけど」

「等等，好像有什么要冒出来了」

#「すまない……高ぶってしまった」

「抱歉……我有点激动」

#　四十七の光がだんだん静まっていく。割りと簡単にオンオフできるらしい。

四十七身边的光慢慢平息下去。看样子其实她可以轻松地控制住。

#「つか、それなに？　その銀色のきらきら」

「对了，那是什么？那个银色的闪闪发光的」

#「これか。これは……」

「这个啊。这是……」

#　四十七は少しためらった後、手のひらに銀色の光球を出現させた。

四十七犹豫了一下，让一个银色的光球浮现在手心里。

#「これはだ。エキソフォースとも言って、この力があることで私たちは身体能力を向上させ、空気中から武器を生成できる。この力がなければ私たちはヴァンパイアと戦うことはできなかっただろう」

「这就是祓气。也称作外原力，就是这种力量增强了我的身体机能，也让我可以从空气中生成武器。要是没有这种力量，我们大概就无法与吸血鬼战斗了」

#　街灯の明るさをぐほどの光は、四十七の指のをこぼれ落ちると、流れ星のように消えていった。その光景は神秘的で、琉花はしばらく目を離すことができなかった。

这股比路灯还亮的凌厉光线，从四十七的指缝间滑落，像流星一般消失不见。琉花一刻也无法把自己的目光从这样神秘的光景中移走。

#「もう使う機会はないと思っていたんだが……」

「我本以为已经不再有用得到它的时候了……」

#　そのきに引っ掛かりを覚える。

琉花有点好奇四十七银华的嘀咕。

#　祓気についてはまだよくわからないが、四十七が空から来たり、銀色の槍を作れたりするのは祓気の力によるものだろう。そんな便利な能力を『もう使う機会はないと思っていた』とはどういうことなのか。そもそも『元』ヴァンパイアハンターとはどういう意味なのか。

虽然还不是很清楚祓气什么的，但四十七能从空中飞来，又能制造出银色的枪，应该都是因为拥有这个叫做祓气的力量吧。这个力量这么好用，为什么要说『已经不再有用得到它的时候了』？而且，『前』吸血鬼猎人，又是什么意思？

#「あんさー、さっき元ヴァンパイアハンターっつってたけど、引退でもしたん？」

「那个——，刚刚说到前吸血鬼猎人，就是已经不干了？」

#　琉花が軽い気持ちで聞いてみると、四十七は答えにくそうに表情を歪ませた。

琉花用轻松的语气试着问了问，但四十七脸上却挂上了一幅像是难以回答这个问题的表情。

#「引退ではなく、不要になったんだ」

「不是不干了，是不用干了」

#「フヨーっていらないってことだっけ？　なんで？」

「不用干了，就是没必要的意思吧？为什么？」

#「すでにヴァンパイアは一体もいない……からだ……」

「因为已经……没有吸血鬼……了」

#「あーね。そーいう…………ん？　あれ？」

「这样——啊。原——来如……此？嗯？」

#　引っ掛かりが膨れ上がり、琉花の頭を悩ませた。

好奇心越发膨胀，琉花脑袋里也越发混乱。

#　眷属はヴァンパイアによって生み出されると四十七は言っていた。製造元であるヴァンパイアがいないというのに、なぜ眷属が出現したのだろうか。

四十七才说过，眷属都是吸血鬼制造的。但她又说已经没有吸血鬼了，那为什么这里还会出现眷属呢？

#　琉花にもわかる不自然さを放置して、四十七は気まずそうに話し始めた。

四十七看上去有些尴尬地开口了，但还没有解释这个琉花也注意到的问题。

#「半年前、狩人同盟……ヴァンパイアハンターの組織は、世界規模のを計画した。そして数ヶ月間の戦いの末、最後のヴァンパイア、アルベルト・フォン・ディッタースドルフを討伐し、私たちは世界からヴァンパイアを撲滅した」

「半年前，猎人同盟……一个吸血鬼猎人的组织，规划了一个世界级的歼灭战。讨伐最后的吸血鬼阿尔伯特・冯・迪特斯多夫。以此我们从这个世界上灭绝了吸血鬼」

#「ぼくめつ……」

「灭绝……」

#　琉花の呟きを抗議ととらえたのか、四十七は悔しげに言った。

或许是把琉花的低语当成了抗议，四十七有些懊悔地说到。

#「ああ、私もおかしいと思っている。眷属がいるということはヴァンパイアがいるということ。つまりそれは、ヴァンパイアが絶滅していないことでもある……狩人同盟の調査が間違っていたのか。サーチアプリに引っかからない能力を持ったヴァンパイアがいるのか……」

「是啊，我也觉得有些奇怪。既然有眷属，那就说明还有吸血鬼。也就是说，吸血鬼其实并未灭绝……是猎人同盟的调查搞错了吗？还是说还有拥有避开索敌应用的能力的吸血鬼活着呢……」

#　そこで四十七はフードをかぶり直すと、琉花に背中を向けた。

于是四十七重新戴上兜帽，背向琉花。

#「とにかく、盛黄には話すことがまだまだある。私の背に乗ってくれ」

「总之，我还有话要和盛黄你说。趴到我背上来」

#「背に乗るって……おんぶ的な？」

「趴到背上……像背小孩那样？」

#　四十七が無言で頷くのを見て、スクールバッグの残骸がこぼれないように注意しつつ、その背中にしがみつく。彼女のロングコートからは土と鉄のいがした。

看到四十七默默地点了点头，于是琉花一边小心地抓紧书包的残骸，一边小心地趴上四十七的后背。四十七身穿的风衣上遍布着泥土和金属的气味。

#「祓気を使って私の家まで飛ぶ。口を閉じていてくれ」

「我准备用祓气飞回家里。你把嘴巴闭上」

#「ん？　飛ぶってどゆ…………ごおうっ！」

「嗯？什么飞……呜哦！」

#　急な衝撃が首にかかる。反射的に目を閉じると、内蔵がせり上がるような感覚が訪れた。強い風がをで、髪が後ろになびいている。

首先是头部感到突然的冲击。琉花反射性地闭上眼睛后，内脏感到一种上升的感觉。随后，强风抚过脸颊，头发也被吹到脑后。

#　目を薄く開くと、眼下に町が広がっていた。

微微睁开眼睛，宽广的城市正在自己下方。

#　あー、飛ぶってこーいうことね…………先に言ってよ超コエーよ！

啊——，飞起来原来是这样啊……提前说清楚啊超恐怖啊！

#

#「ヴァンパイアは人の血と肉を食糧とする種族だ。

「吸血鬼就是以人的血肉为食的种族。

#　な、再生力、不老といってもいいほどの寿命を持ち、中には発火現象や瞬間移動といった超自然的な能力を持つ個体もいた。

拥有强劲的力量，再生能力，寿命极为漫长，可谓是长生不老，而且有的个体还拥有喷火、瞬移这种超自然的能力。

#　だからといって、けしてやつらは人類の上位存在ではない。日に当たれば苦しみえ、十字架や仏像といった宗教用具に忌避感を覚える。もちろん、祓気にも弱い。

但即便如此，它们也决不是什么高于人类的存在。被太阳照射则会极度痛苦，而且也会避讳十字架或者佛像等宗教用品。当然，面对祓气时也很脆弱。

#　しかし、やつらと人間を決定的に違えているのは能力や弱点ではなく、その思考……殺人への抵抗がないことだ。

但是，它们与人类之间的根本性的区别不在于能力或者弱点。而是它们的习性……它们无法抗拒杀人。

#　ヴァンパイアにとって人間は捕食対象。いちいち罪悪感を覚えていたら自分が生きることができないというわけだ。そして、そういった生活を続けているうちに、やつらは殺人行為自体を楽しむようになる。元は同族だというのに、だ。

对吸血鬼来说，人类只是猎物。因此一旦对杀人产生丝毫罪恶感，它们就将无法生存。于是随着时间变化，吸血鬼逐渐开始把杀人行为当做享乐。尽管，大家曾经都是同族。

#　……ああ、そうだ。やつらは人間から変異する。

……啊，对了。它们其实是从人类变异而来的。

#　多くの創作物で描かれるように、ヴァンパイアの血液を注入された人間はヴァンパイアに変異する。肉体や脳が変質し、人の血肉を欲するようになる……だが、血液を注入されたからといってでもヴァンパイアになるわけではないし、変異中であれば祓気や投薬によって治療もできる。

就像许多作品中描写的那样，被注入了吸血鬼的血液的人类，会变异成吸血鬼。身体和头脑都会变得开始渴求人类的血肉……但是，并不是任谁被注入血液就都能变成吸血鬼的，而且如果变异还没有完成，那就能够用祓气或药物治疗。

#　警察などの国家権力もヴァンパイアの存在は知っているが、専門の訓練を受けていない人間ではやつらと戦うことができないため、戦闘は我々に任せ、彼らには社会への混乱を防ぐための情報操作に専念してもらっている。

警察等国家权力机关也知道吸血鬼的存在，但没接受过专门训练的人类无法与吸血鬼战斗。因此，就将战斗交给我们，而他们则专注于情报管理，防止社会陷入混乱。

#　ここまでがヴァンパイアについての概要だが、理解できただろうか。私も説明が得意ではないので、わかりにくかったかもしれないが、どうだ？

这些差不多就是有关吸血鬼的主要内容了，听懂了吗？我不太擅长和别人讲东西，说不定会说得比较复杂。怎么样？

#　ム、盛黄？　返事がないが、大丈…………あ、気絶している…………」

盛，盛黄？说句话啊，没……啊，晕过去了……」

#

#　道中で脳と三半規管を揺さぶられ続け、目的地であるマンションに到着した頃、琉花はすっかりへとへとになっていた。

琉花的大脑和半规管一路上都处于颠簸中，等到到达目标的公寓时，琉花已经彻底支棱不起来了。

#　腹を押さえながらマンションエントランスに入り、エレベーターの端で座り込み、よたよたと七階で降りる。内通路のドアのひとつに四十七がセキュリティカードをかざすと、ロックの外れる音が聞こえた。

捂着肚子走进公寓的玄关。坐在电梯角落里，晃晃悠悠地来到了七楼。四十七走进走廊，把门卡刷过其中一扇门，随即传来了锁芯作动的声音。

#　四十七に続いて部屋に入る。靴を脱いで廊下を進み、リビングらしき薄暗い空間に入ったところで、琉花はその場にへたりこんだ。

琉花跟着四十七走进公寓。把鞋子脱在走廊，走进一个有些昏暗，像是客厅的地方之后，琉花就一头栽倒在地上了。

#「も……げ、げ、げ……限界っしゅ……」

「已经……不，不，不……不行了……」

#　気分が悪い。地面が揺れている。太ももが悪寒に包まれている。気をつけていないと喉から変なものが出てきそうだ。

太难受了。天旋地转，两腿战战。要是自己没有尽力忍住的话，就要有什么不妙的东西要冲破喉咙了。

#「水を用意する。そのあたりで休んでいてくれ」

「我把水拿来了。你先在那边休息一下吧」

#　四十七が電気をつけると、近くに柔らかそうなソファが見えた。いずるように近づき、ソファの足元に体を預けた。

四十七打开电灯，琉花看到一张看起来非常柔软的沙发就在自己旁边。于是琉花蠕动过去，让自己靠在了沙发脚上。

#　四十七家のリビングはかなり広く、ドアが五つもついていた。高級そうな家具たちは落ち着いたトーンでまとめられていて、生活感が薄い印象を受ける。家族が住んでいるようには見えない。もしかするとひとり暮らしなのだろうか。

四十七家里的客厅相当大，门都有五个。家具看上去很高级，配色也让人心情平静，但没什么生活的气息。看不出还有家人住在这里，看来她很有可能是一个人住。

#「ほら、飲むといい」

「快点，把水喝了」

#　オープンキッチンから出てきた四十七からコップを受け取る。つい数分前ペットボトルを飲み干したのに、琉花の喉はからからになっていた。

四十七拿着杯子从开放厨房里走出来，把杯子递给了琉花。明明几分钟前才喝完了一瓶水，但琉花现在又渴了。

#「あじゃっす……」

「谢了……」

#　水を飲んでも気持ち悪さは変わらなかったが、心遣いがしかった。

虽然喝水也没能缓解多少恶心的感觉，但琉花的心里却很开心。

#　琉花がコップを揺らしていると、四十七がうかがうように言った。

她晃着杯子的时候，四十七趁机开口了。

#「それで、ヴァンパイアについて理解はできたか？」

「那么，吸血鬼的事情你听懂了吗？」

#　マンションへの道中、琉花は四十七からヴァンパイアの説明を聞いた。

在来公寓的路上，四十七向琉花说了些吸血鬼的事情。

#　ヴァンパイアを題材にした漫画やドラマをいくつか見たことがあるし、四十七を信頼すると決めたので、その事実はすんなり飲み込むことができた……人力フリーフォール中に聞かされたくはなかったが。

虽然琉花看过不少吸血鬼题材的漫画和动画，也决定要相信四十七，相信她说的事情……只是有个人形过山车让她想听也听不了。

#　琉花は先程の話を思い出しながら、

琉花回想着之前的事，

#「ヴァンパイアってやっぱ元人間……なんすよね？」

「吸血鬼，果然本来是人……对的吧？」

#「そうだ。だが、やつらとの共存は不可能だ」

「是的。但是，和它们共存是不可能的」

#　段階を踏んで聞こうとしていたことの答えを先に言われ、琉花の口が閉ざされた。

在琉花问出来之前，四十七提前回答了问题。这回答让琉花说不出话了。

#　元人間で言葉が通じるならば、共存できたのではないか。

既然曾是人类，又能共通语言，真的不能共存吗？

#　そう聞こうと思っていたが、四十七の氷のように冷たい表情を前にして、琉花は質問をする意志を失った。

虽然想问，但看着眼前四十七低到冰点的脸色，琉花还是没敢问出来。

#「やつらは一定期間食事を取らなければ、強烈な吸血衝動と殺人衝動に取りかれる。人を殺さずにはいられなくなる、ということだ……そんな種族と共存などできるわけがない」

「他们如果不定期进食，就会被强烈的吸血冲动和杀人冲动支配。不杀人就活不下去。所以……和那种种族是不可能共存的」

#　四十七はそこで一度言葉を切り、息を吐いてから話を続ける。

四十七顿了一下，叹了口气才继续说着。

#「狩人同盟もヴァンパイアとの共存を目指したことはある。投薬や手術、非人道的な手段も試みたらしい……そのすべては失敗に終わり、今はそれを試す必要すらなくなった」

「猎人同盟也曾经追求过共存。用药、手术，据说还尝试过一些非人道的手段……但全都以失败告终，如今已经没有继续尝试的必要了。」

#　──ヴァンパイアは滅びたのだから。

——毕竟吸血鬼都已经灭绝了。

#　四十七は続きの言葉をみした。

四十七没把最后这句话说出来。

#　彼女が所属していた狩人同盟という組織は、ヴァンパイアは絶滅したと言っているらしい。しかし、それならば琉花を襲ったあの眷属はなんなのだろうか。

她所属的猎人同盟，宣称吸血鬼已经灭绝。但如果真的灭绝了，那袭击琉花的眷属又是哪里来的呢？

#　四十七は葛藤を払うように首を振った。

四十七摇摇头，甩去脑中的疑问。

#「まずは君が襲われた理由を調査しようと思う。準備をするので少し待っていてくれ」

「先研究一下为什么你会被袭击吧。稍微等一下，我去做点准备」

#　四十七が別の部屋へ消えていくのを見送った後、琉花はよろよろと立ち上がり、髪が乱れるのも気にせずにソファに座った。

看着四十七走进别的房间里之后，琉花晃晃悠悠地站起来，也没管自己乱糟糟的头发，直接坐到了沙发上。

#「ふけぇ～……」

「真是不敢想啊~……」

#　四十七はこれまでヴァンパイアや眷属と戦ってきたらしい。

四十七至今都在与吸血鬼和眷属战斗的样子。

#　そんな殺伐とした世界で彼女は一体どういう生活をしていたのか。

那样充满杀戮的世界里，她到底过着怎样的生活呢？

#　平和な世界で生きてきた琉花にとって、それは想像しにくいことだった。

一直生活在和平的世界里的琉花，难以想象那样的生活。

#「あー……だから休学してたんだ……」

「啊——……所以之前才休学了啊……」

#　ヴァンパイア殲滅戦は数ヶ月間続いたらしい。

她刚才说吸血鬼的歼灭战持续了数月之久。

#　琉花が友人と遊んでいる時も、琉花がに料理を作っているときも、琉花がバイト先でときわと話しているときも、四十七はずっと戦い続けてきた。本来高校二年生として過ごすべき時間を怪物たちとの戦いに捧げ、勝利をもぎとった。

在自己和朋友们玩乐的时候、帮凉子做饭的时候、打工的时候和常羽聊天的时候，四十七都一直在战斗着。把本用于渡过高二的时光奉献给了战斗，而且从这些怪物手中夺取了胜利。

#「すごいな……」

「真厉害啊……」

#　琉花がひとつ年上のクラスメイトに尊敬の念を浮かべていると、その当人が戻ってきた。

琉花在心中对这位比自己大的同班同学敬重起来的时候，她本人回来了。

#　片手に平箱を持っている。あれが調査のための準備なのだろうか。

她单手拿着一个匣子。大概这就是为了调查做的准备。

#「なにそれ？」

「那是什么？」

#「これは採血キットだ。君の血を採取する」

「这是采血盒。准备取一些你的血」

#「な、なんで？」

「为，为什么？」

#　なぜ血をう怪物から救助されたのに、血を取られなければいけないのか。

明明从以血为食的怪物手中得救，怎么还是要取血不可啊？

#　琉花が首を傾げていると、四十七は無表情のまま言った。

面对琉花满脸疑惑的样子，四十七面无表情地开口。

#「狩人同盟の研究によって、人の血液には血液型以上の種類があることが解明されている。ヴァンパイアになりやすい血であるとか。ヴァンパイアハンターになりやすい血であるとか。やつらの術に干渉されやすい血であるとか……君の話によると、あの眷属は男性から君に標的を変えたんだろう？　その理由は君の血にある。調査しておいて損はない」

「根据猎人同盟的研究，发现人的血液在血型之外还有更多种类。比如容易成为吸血鬼的类型。或者容易成为吸血鬼猎人的类型。还有容易影响到他们的能力的类型……你刚刚说，那个眷属是放弃了那个男人，转而盯上你了对吧？很有可能其中原因就是你的血。反正检查一下也没坏处」

#　四十七は平箱をテーブルに置くと、中から小さなのような道具とクリーム色のを取り出した。おそらくあれらの道具で採血するのだろうが、おもちゃかピアッサーにしか見えない。

四十七把匣子放到桌上，从里面拿出一个小小的注射器一样的东西，和一叠淡黄色的纸。大概就是用那些东西取血吧，就是怎么看感觉都像是玩具穿耳器一样。

#「安心してくれ。この器具は国際医療機関お墨付きだ。先から針が出て、真空状態の中身に血が貯まる。吸い取った血をこの紙につけると、血の種類がわかる。簡単だろう？」

「放心吧。这些都是国际医疗机关认证过的工具。针头从前面这里伸出，把血液吸到真空状态的管身里。再把取到的血液涂到纸上，就可以知道血液的种类了。很简单吧？」

#「や、刺されんの自体がやなんだけど……」

「不是，我就是不喜欢被扎……」

#「今までアルコール消毒でアレルギーが起こったことは？」

「你对酒精过敏吗？」

#「拒否権なしっすか……」

「我有否决权吗……」

#　アレルギーがないことを伝えてをまくり、ソファの肘掛けに腕を乗せると、逃がさないとばかりに四十七に手首をがしりとつかまれた。

回答了自己不对酒精过敏之后，琉花挽起袖子，把胳膊放在沙发扶手上。然后四十七紧紧抓住了琉花的手腕，像是告诫她不要逃跑一样。

#「力を抜いてくれ」

「放松」

#「うぇぇ……」

「唔诶诶……」

#　採血キットからのぞくの針を直視できずに琉花が顔をそらすと、

琉花不敢直视闪着金属光泽的采血针头，看向了别处，

#「よし、終わったぞ」

「好了，搞定了」

#「はやっ！」

「呼啊」

#　顔を戻すと、採血器の下半分が赤くなっており、琉花の腕には止血テープがられていた。手際がよすぎる。こういった技術もヴァンパイアとの戦いで培われたのだろうか。

扭回头来，可以看到采血管的下半部分已经变成了红色，手腕上也被四十七贴好了止血贴。这技术也太好了。和吸血鬼战斗，还要学这种技能吗？

#　四十七が採血器からクリーム色の紙に血を垂らすと、数秒もたないうちに変色が始まった。暗めの赤色だった琉花の血は、だんだん明度と彩度を上げていき、目が痛くなるほど鮮やかなビビッドピンクになった。

四十七把采血器里的血液滴到淡黄色的试纸上，没过几秒，试纸就开始变色了。本来是暗红色的血液，越发地明亮鲜艳起来，最终变成了鲜艳得甚至有些刺眼的亮粉色。

#　ひなるが好きそうな色だな、などと思いつつ四十七を見る。

看起来是日菜瑠会喜欢颜色。琉花一边这么想着一边看向四十七。

#「かなり誘引度が高い……これはテンプテーション・ブラッドだな」

「吸引力非常高……这是temptation blood」

#「てんぷら？」

「天妇罗？」

#「テンプテーション・ブラッド。日本語ではと言って、ヴァンパイアを特別寄せつけやすい血だ。やつらはこの血が非常に美味に感じるらしく、この血を持つ者を優先的に狙っていた」

「Temptation blood。日语中称为『诱引血』，指特别容易吸引吸血鬼的血型。它们好像是觉得这种血特别美味，会优先盯上流着这种血的人」

#　琉花の血はヴァンパイアや眷属を誘引しやすい特殊な血であるらしい。眷属がストーカー男から琉花に標的を変えたのは、四十七の推測通り琉花の血が原因ということだ。

看来琉花的血是特别容易吸引吸血鬼和眷属的特殊血型。和四十七推测的一样，眷属放弃跟踪男选择袭击琉花的原因就在于琉花的血。

#「ってことは、ヴァンパイアに狙われやすい血ってだけ？」

「也就是说，这种血只是容易被吸血鬼盯上而已？」

#　気になったことを聞いてみると、四十七は気まずそうに目をそらした。

琉花有些好奇地问出来之后，四十七尴尬地看向了别处。

#「いや、それだけではないが……」

「不是，不止是容易被盯上而已……」

#「教えてよ。自分の血なんだから、一応知っときたいし」

「告诉我吧。这是我的血，想多了解一点嘛」

#「しかし、これはくだらない偏見であるから……」

「不过，只是些无聊的偏见而已……」

#「いいからー」

「没事的啦——」

#　琉花が答えを催促すると、四十七は言いにくそうに言った。

在琉花的催促之下，四十七看上去有些艰难地开口了。

#「その……テンプテーション・ブラッドは……の者に多いと言われていて……」

「就是……temptation blood的类型……据说大多都比较开放……」

#「タインってなに？」

「开放？什么开放？」

#「性欲が強いということだ」

「就是性欲强的意思」

#「……エロじゃん」

「……这不是说好色嘛」

#「……エロだ」

「……是好色」

#　琉花はしばらく四十七と複雑な表情で見つめ合った。

琉花和四十七用复杂的表情对视了一会。

#　ストーカーされて、怪物に襲われて、血ぃ取られて、エロ呼ばわりされるって……今日のあたしかわいそすぎんか？

被跟踪，被怪物袭击，被取血，又被说好色……今天的我也太惨了吧？

#

#　今夜の事件については四十七が引き続き調査するということになり、琉花はひとまず帰宅することになった。

四十七决定继续调查今晚发生的事件，琉花则选择先一步回家。

#　テンプテーション・ブラッドの影響でヴァンパイアや眷属に襲われる危険が高いということで、家まで四十七が送ってくれることになった。マンションから出る時、空中移動を勧められたが、二度としたくなかったので徒歩での帰宅だ。

因为琉花是容易被吸血鬼和眷属袭击的Temptation blood类型，四十七决定送琉花回家。离开公寓的时候，尽管四十七说可以飞回去，但琉花不想再经历一次，所以还是选择走路回家。

#「盛黄。しつこいようだが今夜のことは他言無用だ。わかったか？」

「盛黄。虽然说了很多次，但今晚的事情不可以告诉其他人。知道了吗？」

#　隣を歩く四十七に言われ、琉花はうんざりしながら頷きを返す。

听到走在旁边的四十七这样说，琉花不耐烦地点了点头。

#「そんなに言わなくてもわかってるって。あたし、こー見えても口堅いんすから」

「不说这么多次我也知道的啦。我啊，虽然看上去是这样，嘴巴可是很严的」

#「口が堅い……本当か……？」

「嘴很严……真的吗……？」

#「マジマジ。秘密破ったら針千本飲んでいーっすよ」

「当然当然。要是说出去就吞千根针」

#「あんなに注射針を苦手そうにしていたのに……？」

「明明连注射针都那么怕……？」

#　そんな会話をしているうちに盛黄家が見えてきた。四十七のマンションとはまったく違う一軒家。けして立派ではないが、安心感漂う自分の家。

只要这么几句话的工夫，就已经可以看到盛黄家的房子。一幢和四十七的公寓完全不一样的房子。自己的虽不气派，但充满着安心感的家。

#　帰ってきたという実感がいてきて、琉花の肩から力が抜けていく。

心底涌出到家了的感觉，琉花终于得以放松下来。

#「では、また学校で」

「好，之后就学校见了」

#「あ、うん。また学校で」

「啊，嗯。学校再见」

#　別れのをして引き戸を開く。

与四十七道别，然后琉花拉开玄关的拉门。

#　送ってくれたことの礼を言い忘れたことに気づいて振り返ると、すでに四十七の姿は消えていた。

忽然想起还没感谢四十七送自己回家，一回头发现已经看不到四十七的踪影了。

#　誰もいない家に上がり、紙袋片手にスマートフォンを取り出す。

走进空无一人的家，琉花一只手从纸袋里掏出手机。

#「無理矢理アプリいれられたけど……これ、役に立つんかなー……」

「强行要我装了这个APP……真的用得上嘛——……」

#　帰路の途中で琉花は四十七にあるアプリを登録させられた。

回家路上，四十七让琉花注册了那个APP。

#　ヴァンパイアサーチアプリ。狩人同盟が開発したアプリケーションで、付近にヴァンパイアなどが出現するとマップ上の光点で教えてくれるらしい。ヴァンパイアは赤点、眷属はオレンジ点、祓気発動中のヴァンパイアハンターは青点で表示されるらしい……今のところは表示も通知もなにも反応がない。

吸血鬼索敌应用。一款由猎人同盟开发的手机软件，如果附近出现吸血鬼之类的东西，就会用光点把它标记在地图上。据四十七说，吸血鬼是红色光，眷属是橙色光，正在使用祓气的吸血鬼猎人会用蓝色光……它现在没有显示任何东西也没弹出任何通知，毫无反应。

#「んま、恩人の言うことは素直に聞いとくか……」

「嗯嘛，我就好好听救命恩人的话吧……」

#　色々思うことはあるものの、四十七が助けてくれたことは事実だ。その四十七が言っているのだから、多少の面倒くささは我慢するべきだろう。

尽管脑海中涌出各种各样想法，但四十七确确实实帮了自己。所以既然是四十七说的事，克服一下这点麻烦也是应该的。

#　自室に入り、ベッドの上で紙袋を逆さにすると、ずたずたになったスクールバッグとともに四十七から渡されたヴァンパイア対策グッズが落ちていった。ＵＶライト、防犯ベル、ニンニクチップス、銀の粉末が入った……。

走进自己的房间，琉花把纸袋里的东西倒在豹纹床单上。四十七给自己的用来对付吸血鬼的小道具和已经支离破碎的书包掉了出来。紫外线灯，警报铃，大蒜薄片，还有一个装着银色粉末的小瓶子……。

#　ベッドから銀の粉末が入った小瓶を持ち上げる。この粉末は『聖銀の粉』といって、祓気が込もった銀粉らしい。小瓶ごとヴァンパイアや眷属に投げつけると容器が破裂し、ダメージを与えることができるのだとか。

拿起掉在床上的这个小瓶子。这里面的银粉叫做『圣银粉』，据说是注入了祓气。把这个小瓶子砸向吸血鬼或者眷属，破碎之后就能对他们造成伤害。

#　できれば使う時はこないで欲しい、などと考えながら小瓶を上に掲げる。

希望用到它们的那一刻永远都别来，琉花一边这样想着，一边打开了瓶盖。

#「きれーだなー……」

「真——好看啊——……」

#　電灯が小瓶を貫き、銀色のきらめきを琉花の目に落とす。

灯光穿过瓶身，银色的光芒落入琉花眼中。

#　四十七の髪やを連想させる美しい輝きにしばし見とれて──あることを思いついた。

这道光芒摄人心魂，让人想起四十七银色的头发和眼睛——琉花突然想起了什么。

#「これなら、あれができるんじゃね……？　あだっ」

「要是这个的话，说不定可以……？啊疼」

#　小瓶が手から滑って額にぶつかった。

小瓶子从手中滑落，掉到了额头上。

#　った部分が当たったせいで額が赤くなってしまったが、琉花の口から笑みを奪うことはできなかった。

即使尖锐的位置把额头都磕红了，也没能夺走琉花嘴角的笑容。

#

#

#「んでさ、あいつしてたわけ」

「所以，他就这样劈腿了」

#　めいりが不機嫌な声を出したのは、朝のホームルーム前のことだった。

早上的班会前，芽里不快地说着。

#「ちょっと怪しいと思ったから詰めてみたら、むしろ浮気相手はお前だ、とか、遊びに決まってんだろ、とか、ヤラせもしねえのに偉ぶんなよ、とか言いやがって。ビンタしたらネイルチップぶっ飛んで。最悪。最悪中の最悪」

「感觉有点可疑就多问了几句。结果他说什么我才是第三者，还说我八成也只是打算玩玩。说我装什么白莲花，碰都不给他碰。扇了他一巴掌结果还把甲片崩飞了。真是太烦了。烦透了」

#　めいりの言う『あいつ』とは、読者モデルの仕事で知り合った大学生のことだろう。やはり琉花とひなるの嫌な予感はあたったようだ。

芽里口中的『他』，就是做读者模特的工作的时候认识的那个大学生。看来琉花和日菜瑠的不好的预感还是成真了。

#「つーわけで、琉花。甘えさせて」

「所以嘛，琉花。安慰我一下嘛」

#「おー、よしよし大変だったねえ」

「啊——，没事了没事了芽里也不容易呢」

#　しなだれかかってくるめいりを受け止めて、肩をぽんぽんと叩いていると、ひなるが疲れた声で言った。

琉花抱住无力地靠过来的芽里，轻轻地拍着她的肩膀。但日菜瑠又疲惫的开口了。

#「た、大変なのはこっちだなも……昨日は早く寝る気だったのに……」

「不，不容易的还有我啦……明明昨天本来还想早点睡的……」

#　メイクで巧妙に隠しているが、ひなるの目の下にはクマが薄っすらと見える。昨晩遅くまでめいりの愚痴通話につきあわされたらしい。

在眼妆的巧妙掩盖之下，还是能隐约看到日菜瑠眼睛上的黑眼圈。好像是被芽里拉着煲电话粥到了很晚。

#「だって、琉花が出てくんなかったんだからしょうがないでしょ」

「因为琉花的电话打不通，我也没办法嘛」

#「あー……んじゃ、るかちんが悪いね……」

「啊——……那，就是琉花亲的错了呢……」

#「え、あたしのせいなのこれ」

「诶，怎么变成我的错了？」

#　友人たちの理不尽な意見に琉花が反論しかけた時、教室のざわめきが静かになった。

琉花出言反驳朋友的胡言乱语的时候，嘈杂的教室突然安静了下来。

#　三日目になると考えなくともわかる。四十七銀華が登校してきたのだ。

这种场面已经是第三天了，不用细想就能知道这是四十七银华来了。

#「ひなー、めいパス」

「日菜—，接好芽里」

#「え、やだ。フツーに困る……うぎゃー！　暑苦しいも！」

「诶，别啊。也太让人受不了……呜呀——！好热！」

#　ひなるにめいりを押し付けて立ち上がり、琉花は四十七に近づいていった。

把芽里塞给日菜瑠之后，琉花从座位上站起来，走向四十七。

#　四十七の表情は昨日となにも変わらなかった。崩れることは絶対にないように思えるクールフェイス。

四十七的表情和前一天一模一样。顶着一张泰山崩于前也面不改色的扑克脸。

#「はよっす。四十七さん」

「早啊。四十七同学」

#「ああ、盛黄。おはよう」

「啊，盛黄。早上好」

#　四十七がスクールバッグから教科書を取り出して机の上に置いていく。教科書が真新しいのは、復学する直前に購入したということだろうか。

四十七从书包里取出教材，放到桌子上。崭新的教材，大概是复学前才刚刚买到的吧。

#　琉花は手を丸めると、四十七の眼前に突き出した。

四十七把手握成拳，伸到四十七的眼前突然张开。

#「じゃーん、これどーすか」

「锵，这个怎——么样？」

#　四十七の動きが止まり、その顔に戸惑いが浮かんだ。

四十七停下了动作，脸上浮现出困惑。

#「どうとは、なにが？」

「什么怎么样？」

#「ネイル、ネイル」

「甲片，甲片啦」

#「ねいる……爪……？」

「甲片……指甲……？」

#　四十七は落ち着いた目で琉花の爪を見つめて、

四十七用沉着的目光看向琉花的指甲，

#「まさか……！」

「难道……！」

#　それに気がつくと、顔をこわばらせた。

然后注意到了什么，表情僵硬了起来。

#「き、君……聖銀の粉を爪に塗ったのか……!?」

「你，你……把圣银粉涂到指甲上了……！？」

#「うん。いー感じにできてるっしょ。ぎゃお～」

「是啊。感觉还不错就试了试。嗷呜~」

#怪獣の鳴き真似とともに手を前後に動かすと、四十七の銀色の瞳に銀色のネイルが映り込んだ。

琉花一边前后晃动着双手，一边模仿怪兽的吼叫。但四十七银色的眼中只有那几个银色的甲片。

#　昨夜、聖銀の粉をネイルにすることを思いついた琉花は、手持ちのジェルとＵＶライトを駆使して銀ラメネイルをつくりだした。めいりからのメッセージが聞こえないほどの集中力で作業を続け、見事完成させた時はを握りしめたものだが……、

昨晚，冒出要把圣银粉做成美甲的想法之后，琉花就用手头的滴胶和紫外灯做出涂了银色闪粉的甲片。认真得就连芽里发来消息都没听见，终于完美地做好的那一刻真是太紧张了……，

#「あれ、なんかまずった？」

「怎么了，有哪里不行吗？」

#　四十七の反応を見る限り、褒められた行動ではない気がしてくる。

看到四十七这个反应，琉花有种自己没做好事的感觉。

#「いや、まずくはないが……そうか……敵にするよりも体に塗布したほうが一般人にとっては護身になる、か……しかし、前例がないし……」

「没事，没什么不好……对啊……对普通人来说，涂在身上确实比扔出去更能保护自己，吧……不过，还没人干过这种事情……」

#　四十七は悩ましそうな表情でひとりごとを言っている。

四十七有些困扰地自言自语。

#　目周りにも塗ったって言ったらキレっかな？

要是把自己还当做眼影涂了的话，她会生气吧？

#　琉花が様子を見守っていると、四十七は空気が抜けたようにんだ。

琉花盯着四十七的时候，四十七突然一改态度，笑了起来。

#「まあ、君らしいな……」

「没事，真有琉花的风格……」

#　その表情は聖母のように優しく、琉花は思わず見とれてしまった。

那副表情像圣母一样温柔，让琉花看得怔住了。

#　やっぱり顔がよすぎるなこの人。

这个人长得太好看了吧。

#「だが、次にそういうことをする時は事前に連絡してくれ。おかしな効果が出たら君が困ることになる」

「但是，下次想做这种事的话情先和我联系一下。要是发生奇怪的事情的话，到时候你也麻烦」

#「そーだね。りょっす」

「确实呢。我知道啦」

#「そろそろ授業が始まる。座席に戻ったほうがいい」

「差不多要上课了。你应该回座位了吧」

#「あ、ほんとだ。んじゃね」

「啊，对诶。那就这样」

#　指をひらひら振って四十七から離れ、自分の席に戻ると、目を丸くしているひなるとめいりに遭遇した。

琉花晃晃手指与四十七道别，走回自己的座位。对上满脸都是震惊的日菜瑠和芽里两人。

#「なにその変な顔。どした？」

「你们怎么这幅样子。怎么了？」

#「いや、どしたのはこっちのセリフっつうか……」

「不对，该说这句话的是我们才对吧……」

#「四十七さんとなにがあったも？」

「你和四十七同学之间发生了什么嗼？」

#　ひなるに聞かれ、昨晩のことを思い返す。

被日菜瑠一问，琉花回想起昨晚的事情。

#　帰宅中、ストーカーに会い、ヴァンパイアの眷属に襲われ、四十七銀華に助けられた。

回家路上，遇到跟踪狂，被吸血鬼的眷属袭击，被四十七银华救了一命。

#　琉花としては命の恩人である四十七の活躍は積極的に広めていきたかったが、彼女との他言無用の約束もある。

琉花本想积极宣传她的救命恩人四十七的事迹，但自己又和四十七约好了绝不说出来。

#　本来言おうとした言葉をぐっと飲み込み、琉花は口角をくいっと上げて、

原本想说的内容停在嘴边，琉花勾起嘴角，

#「いー女には秘密があるもんなんだぜ」

「好女人也一样会有秘密啦」

#　キメ顔でふたりに微笑みを向けた。

说完对着两个人耍了个帅。

#「「うざっ」」

「「真讨厌」」

#　ひどくね？

过分吧？